

ライトノベル論

浅野 ※※
※※ ASANO

¹ 中京大学現代社会学部現代社会学科
² 学籍番号 ……

1. はじめに：研究主題（私の関心）

近年では、本屋などへ行くとライトノベルのコーナーが昔と比べ大きく設けられている。それに、そのライトノベルが社会的に捉えられていることもある。現在ライトノベルは社会的にどのような評価を受け、どのような立場のものとして扱われているのだろうか。そこを追及していきたいと思う。

私がこの研究をした理由は、ライトノベルが好きであるという理由以外にも、様々な疑問があったからである。その疑問の中心としては、そもそもライトノベルと一概に言っても、実際ライトノベルとは何なのか。そして、どこからどこまでの本をライトノベルと呼ぶか。などということである。

さらには日本人の活字離れは問題視されている。ライトノベルは活字と呼んではいけないのだろうか。そして、アンケートなどで見る、「一か月で本をどのくらい読むか」という質問にライトノベルは含めてもよいのかという疑問もある。

2. ライトノベルの定義

ライトノベルというものは、日本のサブカルチャーの中で生まれた小説のカテゴリの一つ。英単語の Light と Novel を組み合わせた和製英語であるが、現在では英語圏などでも日本の小説ジャンルを指す単語として使用されている。略語としてはラノベ、ライノベ。稀にはあるが、軽文学や軽小説と表記される場合もあるというものである。しかし、ライトノベルの定義と言うものは非常に曖昧なものである。現在の基準となっているライトノベルの定義としては、「表紙や挿絵にアニメ調のイラストを多用している若年層向けの小説」や「中学生～高校生という主なターゲットにおいて読みやすく書かれた娯楽小説」「キャラクターを中心に創られている」「ライトノベルを発行しているレーベルから出ている」などがある。しかし、人によりライトノベルの定義そのものが変わるのも事実である。

現在のライトノベルの定義から考えれば、世界的大ヒットである「ハリーポッターシリーズ」もライトノベルと呼んでも良いと考えられる。実際「ハリーポッター」はキャラクターを中心にしたものである上、中高生をターゲットにもしている。社会的評価から「ハリーポッター」はライトノベルと位置付けられていない。だが、人によっては「ハリーポッターシリーズ」はライトノベルであると言えるだろう。

3. ライトノベルの起源

ライトノベルという名前の起源は、1990年初めにパソコン通信ニフティサーブの「SF ファンタジー・フォーラム」において、それまでの SF やファンタジーから独立した会議室を、会議室のシスオペであった“神北恵太”が「ライトノベル」と名付けたことが始まりであると言われている。ライトノベル自体の起源については、これもまたいろいろな説がある。1つ目としてはソノラマ文庫の創刊された1975年というものだ。ソノラマ文庫はライトノベルを中心とした文庫レーベルのことであり、朝日ソノラマが出版していたのだが、2007年9月に廃業してしまう。現在は朝日新聞出版刊の“朝日文庫・ソノラマコレクション”や“ソノラマノベルスレーベル”に引き継がれている会社のことだ。

もう一つの説が、“新井素子”や“氷室冴子”などの人気作家の登場した1977年という説もある。“新井素子”は日本の女性 SF 作家であり、ライトノベル作家の元祖と見られている。現在は日本 SF 作家クラブ会長であり、日本推理作家協会会員でもある。代表作として、「星へ行く船」や「グリーン・レクイエム」などがある。もう一人の“氷室冴子”は、日本の小説家

であり、1980年代から1990年代にかけて集英社のコバルト文庫を代表する看板作家であった。代表作としては「海がきこえる」や「ざ・ちえんじ!」「シンデレラ迷宮」などが挙げられる。また、「海がきこえる」は1993年スタジオ・ジブリでアニメ化されている。

4. 重要人物

ライトノベルが社会的に人気が出てくるきっかけになった人物をあげてみる。まず、近年注目された人物として“いとうのいぢ”がいる。この人物は、ライトノベル作家ではなくイラストレーターである。イラスト・挿絵を担当した代表作として、「涼宮ハルヒの憂鬱」「灼眼のシャナ」「時をかける少女」などがある。この人物がきっかけとなり、ライトノベルがストーリーや中身だけでなく、挿絵・表紙などのイラストでも人気ができるかでないかを定める基準になった。

同時期に注目されたイラストレーターの“ヤスダズヒト”も重要な人物である。この人物はイラストレーターがマンガを描くという、最近よく見られる光景の代表者といってよいだろう。“ヤスダズヒト”のイラスト・挿絵を担当した代表作として、「デュラララ!」や「神様家族」などがあり、自身のマンガの代表作としては「夜桜四重奏」や「プラトニックチェーン」などがある。

現在ライトノベル作家として注目されている人物として“鎌池和馬”が挙げられる。「このライトノベルがすごい2011年」で第1位に選ばれた「とある魔術の禁書目録」の作者である。この作品については後に述べよう。他にライトノベル作家として注目されている人物に“西尾維新”や“葵せきな”などがある。“西尾維新”は、小説家・マンガ原作者であり、ライトノベル以外にミステリー小説も書いている。彼の代表作である「戯言シリーズ」は、最初はライトノベルに分類されていなかったものの、ライトノベルの定義が曖昧であり変わっていき、最終的にライトノベルに分類された。“西尾維新”の書くライトノベルは、「このライトノベルがすごい」シリーズで2008年を除き、発刊された2005年以降ベスト10にランクインしている。もう一人の人物“葵せきな”は、同じく「このライトノベルがすごい」シリーズで、ここ3年ベスト10にランクインしている。代表作に「生徒会の一存」「マテリアルゴースト」が挙げられる。

5. 人気作品の人気の理由

ここでは、上記にもある、現在の人気作品の人気の理由などをひとつひとつ説明していく。多くのものに共通して言えるのは、上記にもあるよう、表紙のデザイン・挿絵などがひとつの理由である。それと、ライトノベルの定義にも当てはまることであるが、非日常が人気の理由である。この非日常というものは作品ごとに異なる。なので、「このライトノベルがすごい2011」のベスト10にランクしている作品をひとつひとつ述べ、人気の理由を説明してみる。

・第一位「とある魔術の禁書目録」。レーベルは電撃文庫、著者は“鎌池和馬”イラストは“灰村キヨタカ”の作品。人気の理由としては現実世界ではありえないバトルものというのが大きな理由である。ストーリーだけでなく登場人物一人一人も人気の理由である。主人公の個性が強く、読んでいる側が引き込まれるというのも大きな理由だ。それに、主人公が一人だけでなく、二人三人といることで読者が自分の好きな視点で作品を感じられるなどと、読者層を狙っているために人気があると言えるだろう。

・第二位「僕は友達が少ない」。レーベルはMF文庫J、著者は“平坂読”イラストは“ブリキ”の作品。この作品はタイトルそのものが、いままでなかったような直球で攻めていることで気になる人が出てくるだろう。ジャンルとしても“残念系青春ラブコメ”という今までになかったものである。共感することができる内容をゆるく書いているため、人気があると言えるだろう。

・第三位「バカとテストと召喚獣」。レーベルはファミ通文庫、著者は“井上堅二”イラストは“葉賀ユイ”の作品。テレビアニメ化したこの作品は、普通の学園生活の中にバトルを取り入れたものである。主人公は頭の悪い設定であるため、ギャグの中にシリアスな感じを取り入れているのが人気の理由であると考えられる。それと、個性の強いキャラクターも人気の理由の一つである。

・第四位「ソードアート・オンライン」。レーベルは電撃文庫、著者は“川原礫”イラストは“abec”の作品。これは、もともとはゲーム小説用に応募されたものである。そのため、非日常のストーリーを身近に感じることでできる作品である。そのため読者の人気の理由であるだろう。

・第五位「ベン・トー」。レーベルはスーパーダッシュ文庫、著者は“アサウラ”イラストは“柴田権人”の作品。この作

品のタイトルは「弁当」と戦争アクション「ベン・ハー」をかけたものである。ジャンルとしてはコメディであり、サブタイトルに食べ物の名前が普通に出てくる。作品の内容に「週刊少年ジャンプ」のネタが多用されていたり、2チャンネルで使われている用語も多く出てくるために、読者が親しみやすくなりやすいなどが人気の理由であると言えるだろう。

・第六位「“文学少女”シリーズ」。レーベルはファミ通文庫、著者は“野村美月”イラストは“竹岡美穂”の作品。ジャンルはミステリー、ラブコメ、文学とひとつの作品が多くジャンルに分かれている。登場人物の個性が強く、一人一人に感情を入れて読むことができることが人気の理由であると考えられる。

・第七位「“生徒会の一存”シリーズ」。レーベルは富士見ファンタジア文庫、著者は“葵せきな”イラストは“狗神煌”の作品。ジャンルは学園小説（生徒会）、空気系ギャグパロディ、恋愛系である。この作品は普通の恋愛系と違い、主人公がヒロインを絞らないというものである。このようなものは今までなかったため、読者が興味を示したのだろう。内容もほのぼのとしたものが多く、たまに入ってくるシリアスが読者のハマるきっかけであると考えられる。日常の光景を非日常的に表すところが人気の理由であると考えられる。

・第八位「俺の妹がこんなに可愛いわけがない」。レーベルは電撃文庫、著者は“伏見つかさ”イラストは“かんざきひろ”の作品。この作品もタイトルを直球なものにしている。内容が妹が隠れオタクという設定のコメディ作品。その妹と兄の関係性の変化を描いている。その結果、若年層から強い人気がある。なので、注目され人気のある作品となっているのだと考えられる。

・第九位「デュラララ!」。レーベルは電撃文庫、著者は“成田良悟”イラストは“ヤスダズヒト”の作品。この作品も上記で述べたように、表紙のイラスト・挿絵が人気のひとつであると思う。内容としては、東京を舞台にしているので読者が想像しやすいというのも人気のひとつであると考えられる。その中で非日常を描くというのは読者の興味を引き付けるのにとってもよいものだろう。

・第十位「神様のメモ帳」。レーベルは電撃文庫、著者は“杉井光”イラストは“岸田メル”の作品。ジャンルはミステリーであり、普通の高校生を主人公と雇い主の探偵という奇妙な関係を保っているのは人気のひとつであるだろう。アニメ化も決まっているために、そこも人気があるひとつと言えるだろう。

このようにベスト10に入った作品の人気の理由として共通しているものは、いかに読者が登場人物に感情を移入でき、日常の風景を非日常に表現されているかということである。

6. 社会変化にきっかけを与えた作品

ライトノベルが社会的に影響を与えた作品は多く存在する。ここでは、それを挙げてみる。

「ロードス島戦記」。1985年にテーブルトークRPGの紹介記事として掲載されたのが最初であり、世界観・ストーリー・キャラクターへの人気が高まって、ライトノベルというものを社会的に広げるものとなった。

「スレイヤーズ」。1990年から富士見ファンタジア文庫より刊行されている作品。魔法を使用するバトル系の作品であり、アニメ化もされ人気となった作品。ここからライトノベルにバトルというものが定着を始め、非日常を求められるようになった。

「涼宮ハルヒの憂鬱」。2003年から角川スニーカー文庫より刊行されている作品。上記に述べたよう、ライトノベルの人気基準にイラスト・挿絵というものが大きく影響されるようになった。アニメ化などもされ、本屋でのライトノベルコーナーを拡大させるきっかけともなり、社会的に大きな影響を与えたと言ってよいだろう。なお、2011年6月に4年ぶりに最新刊が発売される予定である。これが社会にどのような影響を与えるかが注目どころである。

7. 社会とライトノベル

このように見ていくと、ライトノベルというものが社会に影響を与えていることが分かる。日本人が活字から離れているということが問題視されているが、ライトノベルを活字と呼んではいけないのだろうか。挿絵が含まれていて、台詞や描写でほとんどが構成されていると言っても、活字であることは確かである。活字離れが進んでいる日本人を活字と向き合わせるには、いきなり文字だらけのものを渡してもしょうがない。ライトノベルなどのもので段階を踏んで活字へと戻っていくというのはよいことであると思う。少しでも活字に触れるということでこのような問題は解決していくのだと思う。

今まで、ライトノベルと関わりを持ってきたことのない人もいるはずだ。きっかけはどんなものでも構わないが、ライトノベルというものを今よりも社会的に取り入れられれば何かしらの変化が起きるであろう。サブカルチャーが表に出てきている今の時代、ライトノベルが社会的に大きく認められる日は必ず来るだろう。

参考文献

このライトノベルがすごい 2011

資料編

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%A9%E3%82%A4%E3%83%88%E3%83%8E%E3%83%99%E3%83%AB>

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%AD%E3%83%BC%E3%83%89%E3%82%B9%E5%B3%B6%E6%88%A6%E8%A8%98>